
自然街の暗殺者

てるぼうず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自然街の暗殺者

【Nコード】

N6268J

【作者名】

てるぼうず

【あらすじ】

自然街という場所とある暗殺者による事件が発生……したにも関わらずマイペースは弥生探偵と長月医師。そんな探偵事務所に女子高生の依頼人がやってきて違和感がありつつ受理。しかし捜査をすすめていく内に違和感が氷解していき、ついに解決と思いきや、探偵なのに誘拐されて!?

1章 迷探偵と依頼（前書き）

まだ完結していないため、中途半端な場所で区切っています。小説初心者ということで温かい目で見守ってください。

1章 迷探偵と依頼

1章 迷探偵と依頼

「……ザザー……昨夜未明、自然街しぜんがいの商店街で身元不明の男性の死体が発見されました……ザザー……警察の調べによると、死体がバラバラに解体されており、怨恨ではないかと……ザザー……なお、現場には「例のカード」が置いてあったことから、あの暗殺者が絡んでいるとみて捜査を……ザザー……プツン」

「ああー！またこのラジオ壊れたあー！」

せつかくの暇つぶしに電源をつけてあげたのに、雑音しか聞こえないんじゃないのよ。これだからアナログは……。

「捜査がどうなのよ！殺されたのは誰だったのよ！」

「あんまり騒いでると、依頼人も逃げ出すよ？」

ラジオを叩いて修理していると、台所から注意された。

「いいじゃん、依頼人どころか、依頼の電話すらないんだから」

まったく、殺人事件が起きたのなら何で私のところに依頼が来ないのよ。

「水輝いー、またこれ直してよー」

煙が出てきたんだけど……大丈夫よね、あいつ器用だし……パシリだし。

さて、パシリ君が修理してくれている間に軽く自己紹介しますね。私の名前は弥生風華やよいふうか、これでも探偵をやっています。近所では「

名探偵風華ちゃん」と呼ばれて尊敬と愛情を

「おい、その迷探偵。自分の世界に浸ってないで手伝ってくれない？」

で、その生意気なパシリは長月水輝。ながつきみずき私の助手……じゃなくて、この街の診療所で働いているの。たしか……医者だっけ？職業は違っただけど、ある意味私と同業者。私たち実は

「おい、そろそろ起きてこっちを手伝って」

うるさいわね、せっかく紹介してあげてるのに。なぜ医者
が探偵事務所にいるのかというと、こいつが昼休みになるといつ
も私の所に来て雑用をしてくれるお人よし兼暇人だから。診療所に
居場所ないのかもね、陰キャラっぽいし。

「……………(ぼいっ)」

ん？何か殺気が……あれ、ラジオが浮いてる。

「つて痛っ！……何すんのよ、この陰キャラ！」

この野郎、私の腹にラジオを投げつけやがった！

「陰キャラで悪かったね。顔じゃないだけ感謝してくれよ、迷探偵
さん」

この陰キャラめ……この恨み、晴らさずにいられますかっての！

「おっと手が滑って」

「うん、危ないから僕が持つておこう」

……投げ返す前に奪われた。

「ちくしょー！」

「お、懐かしいね。小梅 夫のモノマネ？最近テレビで見なくなっ
たよね、僕は好きだったなあ」

「こ、小梅 夫？」

何だろう、今すぐにこいつを黙らせた。

「あんたね、言って良いことと悪いことがあるって隣のおじさん（
五十二歳）に教わらなかったの？」

私なんておじさんに何発叩かれたことか。そのおじさんに代わっ
て私が制裁を下してやるわよ。まずは頭に拳骨を何回もお見舞いし

て、それから……。

「いや、おじさんには教わってないけどね。ほら、これで聞けるようになったよ」

「あ、ありがと……べ、別に感謝してるわけじゃないんだからね！」
「ツンデレ風に言われても……って、感謝してよ」

まったく、たかがラジオを修理しただけで感謝してほしいなんて失礼な陰キャラなこと。私はあんたの暇つぶしに付き合っただけであげてるんだから、反対に感謝してくれてもいいんじゃない？あれ、そういうえばニュースはどうなったのかしら。さっきのニュース、まだ続きしてるかな。

「……………終わってる……………」

そうよね、壊れてからもう三十分以上経ってるし、終わってますよね。

「水輝い、暇ー」

「暇ならその机の書類、整理したらどう？必要な書類だけでも残しとかないと、僕が面倒なんだから。あと、冷蔵庫の中が淋しいから買い物とかさ」

「嫌よ、外は寒いもん」

読んでるだけじゃ分からないだろうけど、今は冬なの。北風が寒いのに外を出歩くななんて私には無理ね。コタツとミカンがあれば一日過ごせるし。

「……………さすが迷探偵、あ、そういうえばさっきから」

いそいそとコタツにもぐる私を見下ろして何か言ってるけど、コタツムリとなった私には届かないわよ。

「邪魔しないでよ。この瞬間が生きてるって感じるんだからー」

「コタツムリ、依頼者が見たらどうするんだろ？帰るのかな」

「依頼者の前でそんなことしないわよ、何を言ってるんだか」

私ではなく扉を見ながら話している水輝の視線を追うと、扉の前に遠慮がちに立っている女性と視線が合った。

「す、すみません。ノックしたのですが返事が無くて……でも声がするからもしかしたら聞こえてないんじゃないかって」

「大丈夫、僕にはちゃんと聞こえていましたから」

「ちよつと、だったら私に伝えるのが普通じゃないの!？」

水輝に注意したつもりなのに、肩をビクツとさせて震える彼女

ひょうとうかあり
兵藤香織（十八歳）私立自然高校に通う高校三年生　が今日の依頼人。第一印象は……図書委員長かな。

「それで……私に依頼があつてここに来たのよね？」

「はい、交番に行つて話したのですが、お巡りさんがここに行けつて」

「そう、そのお巡りさんはいいことをしたわね。その依頼、受けるわ!」

「まだ早いです。依頼内容を聞きましょう」

相変わらず外面がいい奴ね、どうせ受けるんだから今引き受けても問題ないのに。まあ、依頼内容がどんなにつまなくても暇つぶしにはなるしね。

「で……兵藤さんだったわね。どんな依頼を用意したの？」

「それは……最近起きた殺人事件のことなんです」

予想をはるかに上回つた依頼に呆然とした。まさか本格的な依頼とは思つたなかつたわけで……最近の殺人事件といえば

「先ほどラジオで流れてたニュースですね。確か商店街で起きたバラバラ殺人がどうのという事件……ですよね」

水輝、よく聞き取れたわね、雑音だらけのニュース。

「はい、その事件です。私だけじゃどうにもならなくて「待つて、その殺人犯を探せつてこと?」

「いえ、実は殺されたのは私の同級生で……幼馴染なんです。高校では人望があつて私のクラスメイトが数人、敵討ちをしに殺人犯を探してるんですけど、これ以上犠牲は出てほしくないんです。止め

たいんです」

ふむふむ、つまりは……どうゆうこと？

「つまり、そのお友達が殺人犯に見つかる前に、こちらで発見し保護する……という依頼でいいですか？」

おお、さすが助手。見事な要約で実に分かりやすい。でも、この依頼は少し面倒なことになるかも。

「まあいいわ、受けましょう。」

「本当ですか。ありがとうございます！」

うわ……何この子、その笑顔は反則よね。こりゃ高校でも陰で人氣あるキャラね。

……何か悔しいな。

「依頼料についてですが、兵藤さん。今手持ちでいくらありますか？」

「えっと……ちよつと待つてください。」

水輝の図々しく卑しい質問にも嫌な顔せずには鞆の中を漁る兵藤さん。こんな純粹そうな子がいたら……世間で苦労しそうね。

「あら？その財布、男物みたいな財布ね」

鞆から取り出した財布、女子高生が持つにはちよつと違和感が……最近の流行なのかしら。

「財布ですか？ええ、父からのお下がりですので。お気に入りなんです。あ、あの……今財布には一万五千円しか……」

「ああ、お父様のお下がりね。てつきり流行かと思っただわ」

「普通はお下がりがプレゼントって思いませんか？」

「うるさいわね。あ、ごめんなさい。それだったら五千円でいいわよ」

女子高生から一万円はさすがに貰うわけにはいかないからね。

「え？でも……」

「いいのよ、五千円が相場だから……何よ？」

「いいえ、何でもないですよ」

兵藤さんの隣で笑みを浮かべている水輝を睨みつけてから兵藤さ

んに振り向いて少し溜息。言ってもいいのかな、これ。

「あのね、兵藤さん」

「え？……あ、はい？」

「あなたのお友達は必ず見つけて保護はするけど、全員をまとめて見守るのは無理なの。私は一人だし、ね」

「ええ……そうですけど……」

「だから、あなたにも協力してほしいの。手伝ってくれるかしら？」
探偵自らこんなお願いしていいのかは分からないけど、仕方ないよね。

「お手伝い……何をすればいいのですか？」

「簡単よ、そのお友達に夜に外出はしないようにってメールするだけだから。何だったら電話で頼み込めば、あなたなら大丈夫」

「……わかりました、やってみます」

「ありがとう、じゃあさっそくなんだけど、お友達の名前と……あとあなたの幼馴染の名前も教えてもらえるかな？」

兵藤さんにペンを渡して、メモ用紙に名前を書き込んでもらった。

「どう思う？」

兵藤さんを見送った後、水輝に聞いてみた。おそらく私と同じ考えを持っているだろうし、今後何か手助けになることを言ってくれるかもしれない。

「正直言って、私は少し怪しいと思ってる」

「……少しいってことは何か引っかけているってことだね」

「ええ、ただ……それがどこに引っかけているのかがわからないのよ……」

そう、話を聞いた時は不思議に思わなかったのだけど、今思い返してみると何だかモヤモヤする。何だろう。

「残念ながら、僕も同じだよ。さっきから変な感じなんだよね。録

音しとけばよかったかな」

本当に違和感があるんだけど、何故か答えが出ない……そんな時は、

「よし、とにかく調査に行くわよ、水輝！」

そんな時はひたすら調査。それに限る。

「ごめん、僕はそろそろ仕事に戻るよ」

あ……そっか、そういうばもうすぐ昼休みが終わるのか。

「……役立たず」

「う……仕方ないだろ？僕は助手じゃないんだから。そろそろ誰か雇ったらどう？」

「そのうち雇うことにするわ。じゃあとりあえず、現場に行ってくるわね」

誰かを新しく助手に雇うのは嫌なんだけどな。特に水輝みたいな奴が助手に来たら、毎日が書類整理になりそうだし。楽がしたくてこの仕事選んだのに、楽じゃなかったら意味がないよね。

とにかく調査に行きましょうか。はあ……外は寒そうだな。

1章 迷探偵と依頼（後書き）

とりあえず第1章はここまでです。今第3章に取り組んでいますので更新を待っててください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6268j/>

自然街の暗殺者

2010年10月9日21時01分発行